

創造性とは何か

川喜田二郎 著

私たちは、川喜田二郎氏はKJ法の生みの親として理解しているが、その手法の考案は先生の著書「創造と伝統」に詳しく述べられているが、ここではそのエキスがこの9月に読みやすく新書化され再販されたので紹介する。

著者によると、創造性とは発明発見の能力ではなく、問題解決能力のことであり、「科学技術は驚くべく推進しているのであるが、残念なことに、総合の方法を積み残してきた。そのため、発達すればするほど歪んだ科学技術文明をもたらしてきた」と指摘している。

本書は、序章「私の人生背景と本書の出発点」、第1章「創造的行為の本質」、第2章「創造的行為の内面的世界」、第3章「創造的な行為の全体像」、第4章「伝統体と創造愛」で構成されている。

序章「私の人生背景と本書の出発点」では、副題に「現代文明の体質改善に必要なこととは」と記されているように、ソ連邦の崩壊を無血で達成させたゴルバチョフ氏を例に、世界的視野での思考や行動の大切さを説いている。

また、「愛国心と国際性是对立しない」例として、坂本龍馬にとっては、土佐藩と日本のことを考えることとは少しも矛盾しなかったのであり、国際的精神が芽生えていた人物であると述べている。

第1章「創造的行為の本質」では、「創造」とは何か、「創造性」とは何かの問題について考えるべきと述べている。

例えば、チームワークはどうしたらうまくいくかということを考えてそのルールを新しく発

見するとか、自分一人でやる仕事だったら、どうすればうまくやれるかの仕組みを考えだすことが創造の重要な出発点になるとしている。

そこで変化の激しい時代になればなるほど、右手に固有技術、左手に問題解決学とを、両方を兼ね備えることが大切と指摘している。

そして、創造とは、問題解決の能力と言えるが、創造性は保守性と補完的關係にあり、かつ循環関係があるとしている。そして創造的条件は、「自発性」「モデルのなさ」「切実性」であるとし、創造は実践を離れてあり得ないとしている。つまり、空想から創造はなされない。

第2章「創造的行為の内面的世界」では、創造の一番はじめは、何が何だか分からない「混沌」から出発し、自己という主体の意識が生じ、「出会い」があり、関心の発生から矛盾葛藤が起こるので、これを解決した状態を「本然」と名付け、創造における問題解決の道筋を示している。

第3章「創造的な行為の全体像」では、創造的な行為は、野放図な全体状況の底に徹してこそ、絶対感のある行動で全体への価値観の創造に寄与できるのであり、二度と繰り返せない一期一会である。つまり、普通は一般論に流されて、創造的な行為を生み出す「そのとき」の絶対感が理解されず、創造的な行為がいつでも成立するように思われていると指摘している。

第4章「伝統体」と創造愛では、創造的な行為は、その対象となる「客体」を創造するが、同時に主体である自らも脱皮変容させ、さらに創造が行われた「場」もあらたな価値が付加され生み出されるとした。創造的行為の達成により、主体と客体と創造の行われた場への愛と連帯との循環を創造愛とし、これが累積すると伝統体となり、この循環と累積が現実社会の実体であるとしている。

(祥伝社、B 6判180頁、¥760) (山下省蔵)